

## 語彙力がないと、勉強しても意味がない!?

### 東大生が証言する 語彙力の大切さ

偏差値 35 から 2 浪、晴れて東大生となって書いた書籍『読む力』と『地頭力』がいきなり身につく『東大読書』（東洋経済新報社）が話題の西岡忠誠さんが、「語彙力の大切さ」を訴えています\*。

「国語はもとより、数学、英語、社会、理科、あらゆる試験において、日本語の語彙力が身につけていないと、いくら時間をかけて勉強しても結果につながらない」という趣旨の発言は、日本語検定審議委員の一人として「その通り!」と大いにうなずくところだ。

さて西岡さんの話を続けましょう。東大受験の勉強を始めて、一番

大きな壁として立ちふさがったのが「語彙力」だったそうです。実は、国語以外の科目の方が、語彙力が必要になると言っています。中でも、「英語」は日本語の語彙力がないと、絶対に伸びないと西岡さんは言います。語彙力がないと日本語を英語に直せず、仮に直せたとしても語彙力がないので、理解できないというのです。

また、どの科目の試験も、語彙力なしには問題文すら読み取れません。その一例として、受験で出題された、地理の問題を紹介しています。

「レアメタルは、世界中に遍在して埋蔵している ○か×か」。どうってことのないような問題ですが、「遍在」と「遍在」をキッチリ読み分ける語彙力がないと解けません。

にんべんの遍在は「偏って存在すること」、しんじょうの遍在は「広く行きわたって存在すること」と、意味がまるで逆です。あいまいな語彙力だと、こういった落とし穴にはまる危険があります。地理の問題のようで、実は語彙力の問題だとも言えます。

蛇足ですが、答えは×です。希少金属、レアメタルは「世界中、遍く、どこにも当たり前のように存在して

いるわけじゃありませんよね。特定の地域に偏って存在することは、たいてい理解されていますが、「遍在」という字を見た途端、「偏在」との区別が付かなくなる。語彙力不足に泣かされるというのは地理の問題に限らないようです。

### 若手棋士の 語彙力にビックリ!

西岡さんの著作でさらに語彙ブームが加速していますが、ブームのきっかけはこれの方だったと、私はにらんでいます。大東文化大学の山口謠司先生です。

私の担当するラジオ番組にしばしば登場くださる山口先生が書き上げたばかりの著書を手にとりスタジオにお越しになったのはもう 2 年ほど前、2016 年も押し詰まったころ。

「これなんです……」と手渡して下さった本のタイトルを見て「これ、絶対売れますよ!」思わず声を上げたのが『語彙力がないまま社会人になってしまった人へ』（ワニブックス）でした。

「マジで、ガチで、ガッツリ、ぶっちゃけ、ほぼほぼ大丈夫」なんて感じて十分 OK だった学生時代を終え、社会人になった人々の多くが「これだ!」と、すがり付きたくくなるようなタイトルもあり、若い読者だけでなく広い世代に読まれ、あっという間に大ベストセラーになりました。

私を含むおじさんたち、ひょっとして本誌をお読みの皆さまの中にも「まさに自分のことを言い当てられた気がする」と、慌てて書店に駆け込んだ方がいらっしやっただけかもしれませんね。山口先生の本以外の語彙力本も、書店のビジネス書籍

コーナーを中心に平積みされ、次々にベストセラーとなりました。

折しも当時、天才棋士として頭角を現し始めた中学生だった藤井聡太四段が次々と大先輩を撃破して、そのたびに発した勝利の感想も、語彙力ブームに拍車を掛けたように感じます。インタビューで口にした「強くなるのが僕の使命です」。小林裕士七段に勝利した場面での「自分の実力からすると望外の結果」。さらには、澤田真吾六段を下して連勝記録を 20 に伸ばした時の「僥倖としか言いようがない」など、語彙力満載の受け答えがニュースで繰り返し茶の間に流れ、自らの語彙力不足に不安を抱いた人々の間で広がった「語彙力を付けなければ……」という切迫感が、「語彙力ブーム」をあおっていったのかもしれない。

### 政治家の誤読にビックリ!?

かつて、これにちょっと似た現象がありました。ある政治家の発言がきっかけとなって、語彙力関係の本が爆発的に売れたのです。2008 年も終わろうとするころでした。売れに売れたのは、語彙力本とほぼ同じジャンルと言ってもよい「誤読本」です。誤読本とは、読み間違いに警鐘を鳴らし、「誤って覚えた言葉を正しい言葉として覚え直しましょう」と訴える、言ってみれば語彙力本の一つです。

ブームの火付け役の一人が、当時の日本国総理大臣、麻生太郎さんでした。私は政治的には中立の立場ですが、麻生さんのダンディーなでたちには惹かれるとこ

ろがあります。重々しい声の調子から思いもよらぬ「誤読」が飛び出す瞬間を「カワイイ!」と楽しみに待ち望んだギャルもいた、というぐらいいいものです。

一番有名なのは 2008 年 10 月 15 日参議院予算委員会での発言における、「慰安婦問題につきましては（中略）河野官房長談話を踏襲する〜」の「踏襲」の読みかもしれません。あまり普段使わない言葉ですから、いきなりニュース原稿を渡されたら、私も「とうしゅう」と正解を言えるかどうか自信がありません。国会答弁で踏襲をうっかり「ふしゅう」と読んでしまった「総理の誤読」は、まるで大事件のように報じられました。

しかし総理は、そんなことでへこたれるお方ではなかったようです。その後、参議院本会議でも「私は村山談話というものを、基本的に『ふしゅう』してまいります」とおっしゃいました。これも踏襲の誤読かもしれませんが、誤読と言うより「俺の中では踏襲はふしゅうだ!」という信念がおありだった可能性も否定できません。「総理、それ、とうしゅう、です」と助言してくれるスタッフに恵まれなかった恐れもありますが。

“2 度目のふしゅう” から 1 週間もたたないところで、ご出身の名門、学習院大学で行われた日中記念行事でのあいさつの場面。「未曾有の自然災害というものを乗り越えて〜」の「未曾有」を、「みぞう」ではなく「みぞうゆう」と「ゆう」を足して発言し、注目を集めました。

世間の漢字や言葉に対する関心が一気に高まり、『読めそうで読めない間違いやすい漢字』（出口宗和

著）を出版していた二見書房は急ぎよ(?) 相次いで第 2 弾、第 3 弾を発売。100 万部を軽く超え、他社からも雨後の竹の子のように「漢字や読み」などの語彙本が大量に出版されることになりました。

世間が大騒ぎする中、さすが麻生さんは泰然自若と構えたからなのか? 国民の「言葉への関心をより高めたい」との親心からか、「誤読」を連発されます。ここからは発言した時と場所を省略してサクッとご紹介。読者の皆さまの語彙力アップに役立てばとの一心で書き連ねます。

「物見遊山」を「ものみゆうざん」、「低迷」を「ていまい」、「怪我」を「かいが」、「焦眉」を「しゅうび」、「順風満帆」を「じゅんぷうまんぼ」、「思惑」を「しわく」、「有無」を「ゆうむ」、「破綻」を「はじょう」と、書いてるうちに私自身どれが正解か分からなくなってきました。

ここまでくると、麻生さんは「ウケを狙って、わざとやっているのかも?」なんて気もしてきますが、いずれにしても、日本国民に「語彙力の大切さ」を振り返らせる「良い機会」を提供して下さったことだけは間違いありません。

あ、そういえば、最近の安倍総理も「云々」を本来の言い方「うんぬん」ではなく「でんでん」と言ってみたり、「背後」を「はいご」ではなく「せいご」と言ったりと大きくニュースで取り上げられ、結果的に「国民の語彙への関心」を高めた(?) とも言えます。

読者の皆さまには、さまざまなお見解もおありでしょうが、「語彙力の大切さ」を実感していただければ、これに勝る喜びはありません。

### PROFILE

梶原 しげる (かじわら しげる)  
早稲田大学卒業後、文化放送に入社。20 年のアナウンサー経験を経て、1992 年からフリーとしてテレビ・ラジオ番組の司会を中心に活躍。49 歳で東京成徳大学大学院心理学研究科に進学、心理学修士号取得。東京成徳大学経営学部講師（口頭表現トレーニング）、日本語検定審議委員も務める。



\* 一部、東洋経済オンライン「語彙力がない子は「全教科の成績」が伸びない」(2018年9月1日配信)より引用